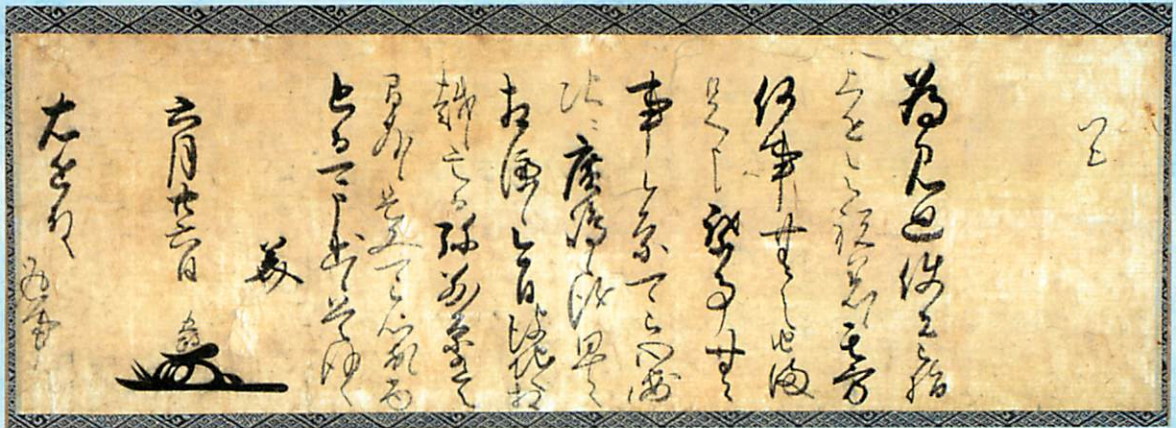


大博物館だまの

No.51

2006.7

津山郷土博物館



「森 忠政書状」個人蔵

以上

為見廻使者被指

上せ令祝着候其方

何事無之由満

足申候我等事無

事候条可被心安候

次二広島之儀早々

相済候今日彼地へ相

越候其而弥別状有之

間敷候是又可被心安候尚

追而可申述候恐々謹言

美

六月二十六日 忠政(花押)

右近殿

御返事

以上

見廻いの為、使者指し

上せられ、祝着せしめ候、その方

何事これなき由、満

足申し候、我らこと、無

事候条、心安かるべく候

次に、広島の儀、早々

相済み候、今日、彼の地へ相

越し候、其れにて、いよいよ別状これある

まじく候、これまた、心安かるべく候、尚

追つて、申し述べべく候、恐々謹言

美(作守)

六月二十六日 忠政(花押)

右近(大夫)殿

御返事

忠広宛森忠政書状について

はじめに

津山城を築城し、城下町を建設して津山藩森家初代藩主となったのは森忠政であるが、その忠政の書状について言えば、残されている事例は非常に少ない。平成16年度の津山城築城400年記念事業に関連した調査の推進に伴い、新たに数点が確認されたが、それでも忠政研究にとってはまだまだ十分とは言い難いのが現状である。

そうした資料とは別に、最近知られた、広島城請取に関連すると思われる忠政の書状がある。ここでは、その内容を検討しながら、当該期に於ける忠政の動きを追ってみたい。

書状の内容と年代

まずは書状の作成された年代の特定が必要である。書状の内容を確認しながら、作成年代を考えてみよう。

書状は、忠政が右近に宛てた、6月26日付けのものである。先方からの見舞いの使者に関するその内容や、最後の「御返事」という文言などから、右近からの使者に対する忠政の返書であることが分かる。

右近からの連絡では、まず無事であることが伝えられ、忠政は、その報告に満足している。そして、本状において忠政も無事であることを伝え、更に、広島の場合は早々に片づくものとして、今日(26日)彼の地(広島)へ赴くが、別状もなく無事に済むだろうから安心するようにと伝える。

差出人である忠政の肩書きには「美」の一字が添えられ、相手方の宛名は「右近」である。右近大夫を肩書きとする人物の名前と、「大夫」が省略されている。忠政の「美」は美作守であることを表している。

忠政は、天正年間から「右近大夫」を使っていたが、秀吉から羽柴姓を与えられた後には、「羽柴右近」あるいは「羽右近」を用いるのが、自他共に通例となっていた。しかし、大阪の陣によって豊臣家が滅亡した後、忠政は、羽柴姓を用い

なくなり、ほぼ同時に「美作守」に改めた。

また、嗣子の忠広が「右近大夫」を称して、幕府の記録に登場するのもこの頃である。こうした忠政の変化は、元和元年(1615)における豊臣家の滅亡と、嗣子忠広の叙任がきっかけとなっているとみて誤りではないだろう。忠広の「右近大夫」叙任にあわせるように、忠政は「美作守」を称するようになったのである。その後、忠政は、寛永3年(1626)の中將叙任以降には、書状などでは「美作中將」を用いる例が多くなる。

さて、書状の相手方であるが、忠政が用いている「其方」「満足」という言葉などから、書状の相手が他家の大名とは考えにくい。そこで、相手の右近を身内と考えてみると、忠政の嗣子忠広が浮かんでくる。忠政の嫡子は大膳亮重政であったが、病気がちだったのか、元和4年(1618)6月5日に亡くなっている。

先に見たように、忠広は、元和元年以降「右近大夫」を用いている。相手方の右近というのは、忠政の嗣子である忠広である可能性が高い。とすれば、書状の年代は元和元年以降で寛永3年までの間ということになる。ちなみに、今回の書状と同様の「美 忠政」と署名した書状で確認できているものには、元和8年(1622)の妙願寺に宛てた書状がある。

さて、この期間内で、忠政が自ら広島に赴くような出来事と言えば、元和5年(1619)に起きた衝撃的な事件、福島正則の改易・転封による広島城の請取以外には考えられない。

広島城請取

元和5年6月2日、福島正則は、その居城広島城の無許可での増築を幕府から咎められたにもかかわらず、その後も、幕府の命令に従わなかったとして、安芸・備後の所領四十九万八千石余を没収されることとなった。この時、將軍秀忠は上洛中であった。

幕府は、正則がおとなしく従わなかった場合に備えて、江戸に諸大名を配置した。また、遠江国の久野城にも警備の軍勢を配置した。そ

して、9日には、將軍の正使として牧野駿河守忠成と花房志摩守正成が、江戸にいる正則の下に遣わされたのである。

6月12日、広島城請取の上使として、永井右近大夫直勝と安藤対馬守重信が命ぜられるが、万一の争乱に備えて、西国に詳しい毛利秀元・加藤嘉明を初めとして、中国・四国筋の大名が派遣されることとなり、森忠政・本多忠政・松平（蜂須賀）至鎮・松平（池田）忠雄・生駒正俊・松平（山内）忠義らもその命を受けた。一大名家取り潰しによる城請取にしては、錚々たる国持ち大名による大軍勢である。万一の用心といっても、幕府の持つ危機感の大きさを物語っている。

『森家先代実録』によれば、6月9日に広島派遣の命を受けた忠政は、直ちに、津山の留守を守っている伯父の森対馬守可政へ書状を送っている。そこでは、広島城がいまだ取り壊されていないため、中四国筋を中心として、多くの大名が広島に派遣されることになり、忠政も命を受けたこと、そして、10日に江戸を出発し、25日には備中で軍勢が勢揃いする予定であることが記されている。そして、伊豆に「鉄砲之者」を送っているため、鉄砲隊がないので、郡奉行に命じて400人から500人の鉄砲隊と、200人から300人の長柄隊を編成するように指示している。

森対馬守宛ての書状に見られる備中国での勢揃いについては、『徳川実紀』に見られる、安藤重信と永井直勝の上使が、備中国まで進んだところで待機して、安芸国に入るのはその後の命令を待ってからとされていることと関連しているであろう。

6月10日に江戸を発った忠政は、22日に津山へ入り、24日には陣立てを整えて出発している。そして、鹿田（真庭市鹿田）で一泊した後、予定通り、25日には備中中津井に勢揃いしたと記している。ちなみに、中津井は、現在の真庭市中津井（旧北房町中津井）地区で、美作と備中松山城下を結ぶ街道筋に位置する小さな宿場町である。『森家先代実録』の記載では、広島に派遣される諸大名の軍勢が、中津井に勢揃いしたかのように読みとれるが、山陽道からかなり北に入った山間の街道筋であり、その点は疑問が残る。

『徳川実紀』の記載では、上使や城請取を初めとする軍勢は、備中国の笠岡に止まり、そこから広島に使者を派遣して、城引き渡しの交渉が進められたとしている。

いずれにしても、幕府軍と合流した忠政軍は、交渉が進む中で、広島城に向かうのであるが、これ以後の進軍は緩やかであったとされる。『森家先代実録』に伝えられる話では、森家の軍勢の前を進んでいたのは加藤嘉明の軍勢で、その進み具合の遅さに、勝手に追いつくこともできない森家の軍勢は閉口したとしている。

一方広島城では、福島家の家臣たちが籠城して一戦に及ぶとの気配もあったが、結局は、福島正則本人の判物により、家臣たちの疑念は消え、留守居の家臣たちから、無事幕府上使に引き渡されたという。

おわりに

こうした広島城請取の経過の中で、忠政の書状を位置づけてみると、書状の日付である6月26日は、忠政軍が中津井に勢揃いした翌日にあたる。『徳川実紀』の記載と照合すれば、笠岡に向けて軍勢が進発した日と考えてよいだろう。忠政の書状では、今日26日に広島に向かうと書いてあり、実際、忠政にしてみれば、笠岡に勢揃いした後は、いずれ広島に進軍するはずとの思いであったと考えられる。そして、大きな混乱もなく広島城の引渡しが済むものと考えていた事が分かる。

実際には、福島家の家臣たちが、広島城に籠城して抵抗するという可能性もあったのだが、忠政としては、忠広に心配をかけないようにとの気遣いだったのかもしれない。

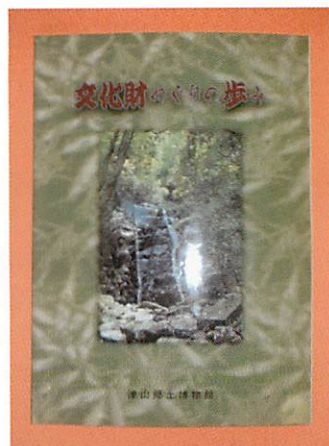
この広島城請取の後、忠政は、福島正則の家臣であった長尾隼人一勝の子を、三千石で津山藩に迎えている。長尾隼人は、福島家中でもよく知られた武将で、一万三千石の知行を得て東条の城に入っていた。そして、その子もまた一廉の武将として知られており、野に埋もれさせるのが惜しかったのであろう。実際、忠政の期待通り、長尾家は津山藩森家にとって欠かせない重臣となった。森家にとって様々な意味を持った広島出兵に関連した忠政の書状である。

（尾島 治）

◆「文化財めぐりの歩み」を刊行しました

昭和63年11月23日に始まった当館文化財めぐりは、本年3月11日をもって第70回を数えました。そこで今回、第1回から第70例会までの内容を記録した「文化財めぐりの歩み」を刊行しました。これは各例会の資料のうち、日時、行程、参加人数、趣旨などを収録し、加えて、8人の方々からそれぞれの参加記を寄せていただいたものです。これによって、18年間の活動の歩みをふりかえるとともに、これからの活動への指針となるものと思います。文化財めぐ

りはこれから100回、200回と続けていく予定ですが、今後もその節々でこのような記録集を作りたいと思います。B5判、本文40頁。カラー図版8頁。



◆展示室・収蔵庫の燻蒸作業

6月12日(月)～6月15日(木)《4日間》

地球環境保護条約によりオゾン層を破壊する物質として、2003年臭化メチル製剤の製造が禁止となったことに伴い、今多くの博物館・美術館は試行錯誤しています。それは、今まで博物館等のガス燻蒸で使用していた臭化メチル・酸化エチレン混合剤が使用できなくなったからです。このため、当館では昨年は代替薬剤として、ヨウ化メチル剤を使って燻蒸を行いました。ところが、これによってさまざま不都合が生じました。例えば、燻蒸時間が従来の24時間から48時間となったことにより、作業期間が長くなって臨時休館日を一日増やしました。また、燻蒸温度も従来の20度以上から25度以上と高くなったことにより、作業日程も従来の6月から7月上旬へと変更を余儀なくされました。さらに、薬剤代がかなり高額であることから、展示室の燻蒸を断念し、

収蔵庫のみの燻蒸とせざるをえませんでした。

今年は昨年の反省にたち、また他館の状況をも参考にして、フッ化スルフルルガスで収蔵庫の燻蒸を実施しました。この薬剤は燻蒸時間が48時間と長いものの、排気時間が短いので、作業期間を従来どおり4日とすることができました。また、燻蒸温度が20度以上なので、従来どおりオフシーズンの6月中に実施できました。しかし、欠点もあります。それはこの薬剤が殺虫能力のみで殺菌のそれがないことです。当館では今までカビの被害にあったことはありませんが、それは毎年臭化メチル剤で燻蒸を行ってきたからです。はたして、殺虫のみで大丈夫か。まだ当分試行錯誤が続きます。なお、展示室は予算の都合上、d・d-T-シフェノトリンを使用して燻蒸しました。

◆セット割引券の販売について

当館と鶴山公園、つやま自然のふしぎ館の3施設が連携して、セット割引券を販売しています。これは、津山を訪れる観光客などへのサービスの一環として、3施設のうち2施設以上の組み合わせで、各館(園)大人料金を2割引とするものです。例えば3施設すべてであれば、通常の1,110円

が880円に、当館と鶴山公園であれば、通常の420円が320円のように割引されます。セット割引券の有効期限はありませんが、払い戻しはありません。販売場所は津山観光センターおよび鶴山公園切符売場となっておりますので、どうぞご利用ください。

博物館
入館案内

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料 一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
※()は30人以上の団体

博物館だより No.51 平成18年7月1日
編集・発行/津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
E-mail: tsu-haku@tv.tn.ne.jp
印刷/(有)弘文社